

沖縄・津堅島で囲碁道場

心が元気になる島

記・木谷正道

船が島に近づくとたくきんの子どもたちが手を振っている。「ようこそ津堅

(つけん)島へ」と横断幕。「まさか僕たちじゃな
いよね」と言っていたら、まさかだった。

津堅島は沖縄の勝連半島

から船で三十分、人口三百人の離島である。十一月二十四日～二十六日、地域活性化のイベントが開催され、東京の自治体やNPOなど十六人が参加した。地元は「津堅島始まって以来」という大歓迎をしてく

れた。

初日はバレーボール大会に飛び入り参加し、海人チームにボコボコに負けた。強い。夜は楽しい前夜祭。

翌日は子どもたちの案内で島の探検と生活体験。続いて私のギター弾き語り子どもたちの合唱・三線、婦人会の大鼓と踊り、高校



囲碁道場で碁を習う

生三線達人トリオの素晴らしい演奏、そして交流会。三日目は陽下村塾という

陳昭雄さんの寺子屋での囲碁道場に二十人が挑戦。九路盤をテープで区切った六路盤を用い、テキストはA三判一枚のみ。ルール説明と対局で一時半だが、子どもたちはすぐに覚えて大人を負かしていた。六路盤は入門には最適である。

高校がないので、子どもたちは中学を卒業すると本島に移り、戻ってこない。人參とモズク以外に産業がないからだ。卒業の日に子どもたちは手漕ぎの船で島

津堅島の子どもの合唱



出ることを夢見て陽光の島を後にした。

また来るよ!

(連絡先) 098・978
6223 陳昭雄)

を一周し、島影を網膜に焼き付ける。でも、子どもたちは底抜けに明るく、人懐こく元気だ。失われつつある日本が残っていた。この地から沖縄本因坊が